

[書評]

佐藤純一著『ロシア語史入門』  
(大学書林、2012年、415頁)

佐藤 規祥

本書の内容は書名にあえて「入門」を付け加えてあるように、ロシア語についての基本的な知識がある初学者を対象とし、偏りのないよう全体としてできる限り一般的な説に従い、ロシア語の歴史的発達の概略を示したものである。このため、個別に現れる音声表記、文法現象や統語現象に必要な説明は、抜粋したテキスト内の具体例に注釈を付けて丁寧に解説されている。

ロシア標準語の歴史は大きく四つの段階に分けてあり、その各時代を大枠で共時的な体系としてとらえ、各段階ごとの発展と交替の歴史を記述してある。これは対象となる時代と資料は重なるけれども、主としてスラヴ基語からの音韻や形態の通時的な変化を記述する「歴史文法」とは、異なる視点に立っていることに注意しておく必要がある。そのため実際、全体として音韻体系の変化についての記述はかなり抑えられている。その反面、文献資料からのテキストの抜粋を多数取り上げ、そこに現れる実例を解説することに尽くされている。これは単にロシア語を時代ごとに文法記述しているというのではなく、同時代の文献であっても文体の特徴に多様性があり、文法現象の変化や交替も見られるということが対訳テキストの解説から知ることができるのである。しかも、内容的に豊富な選文集の性格も併せ持っている。

本書の全体の構成は大きく2部に分けられている。第1部は「ロシア語史概説」に、第2部は「テキスト・対訳と注釈」に充てられている。第1部は序章に続き、第1章「前史と時代区分」、第2章「キエフ時代(古ロシア語期)」、第3章「モスクワ時代(大ロシア語期)」、第4章「18世紀(新ロシア語期)」、第5章「プーシュキンから現代まで(現代ロシア語期)」に分けられている。それぞれの章では各時代の時代背景と言語の特徴や発展、代表的な文献資料について記述されている。

第2章の「キエフ時代」は10世紀~14世紀後半まで続いた。この時代における文献資料の言語はとくに「古ロシア語」とされる。キエフ・ルーシにおいて、古ロシア語は古教会スラヴ語の影響下で形成された東スラヴ共通語の標準的な書き言葉であった。第1節で著者はウスペンスキー Борис А.Успенский の提唱する説に従い、その実態は教会スラヴ語と東スラヴ共通語の「二方言相補使用(diglossia)」であったとみ

なしている。

教会スラヴ語的要素は言語資料の性格によって多いものから少ないものまで様々に異なっている。そこで、著者は最近発表されたトルストイ Никита И.Толстой のジャンル別分類に従い、語彙や文章が規範化された聖典類を含む教会文書からより世俗的な性格の顕著な資料までを 14 ジャンルに分類し、それぞれを代表すると思われる数多くの言語資料についての紹介とその簡潔な解説をしている。このような試みは、ただ年代順に教会文書とそれ以外の文献を分類して提示するよりも、合理的に整理されていると言える。その上、様々な目的で学習する者にとって、研究対象としている同一ジャンル内または異なるジャンル間の諸々の文献の言語的性格を比較検討し、判断するのも向いており、大いに参考になると思われる。このように 14 のジャンル別に分類する方法が今後どう評価され定着するか否かは、これからの研究者達に残された検討課題にもなるであろう。著者があえてこの分類法を提示したのは意義深いと思われる。

さらに、それら 14 のうち 4 つのジャンルからは、とりわけ重要な作品の短いテキストの抜粋に訳文が添えられ、その内容について解説されている。すなわち、歴史記述作品からの『原初年代記』、物語叙述作品からの『イーゴリ遠征物語』、世俗法関連作品からの『ルーシ法典』、日常書簡類からの「白樺木皮簡」である。

第 2 節の「古ロシア語の構造」においては、「標準語の規範」の設定を試み、その基本的な構造が記述されている。その最初の項目の「文字と発音」においては、主として音声表記や書き分けの仕方を中心に要点のみをまとめ、主として教会スラヴ語との対応が見られる具体例に照らし合わせて説明されている。上述の通り歴史文法書で見かけるようなスラヴ基語からの音韻変化の説明は、特別の場合を除き省かれている。

その次の項目「形態論の主要特徴」においては、名詞類と動詞類を中心として各形態の特徴を変化表で示し、その解説中で古教会スラヴ語の具体例を示し、比較対照がなされている。また、動詞の時制形式の使い分けと命令法、仮定法、分詞の実例は主として『原初年代記』、一部は『イーゴリ遠征物語』からの対訳テキストの抜粋を多数引用し、それに丁寧な解説が添えてある。続く第 3 節では 12-13 世紀の古ロシア語資料に観察される音韻面と文法カテゴリーの変化について記述している。

第 3 章の「モスクワ時代 (大ロシア語期)」は 14 世紀後半~17 世紀後半まで続いた。キエフ・ルーシが滅亡し、14 世紀末には大ロシア語、小ロシア語、白ロシア語のもととなる方言への分化が明瞭になった。この章ではモスクワ方言を中心に形成された大ロシア語の構造と変化について記述されている。15 世紀以降はロシア正教会に対するバルカンの正教会の影響が強まり、書き言葉としての教会スラヴ語にもその影響が及んだ。これを「第 2 次南スラヴの影響」と称し、それは『ペルミのステファン伝』や『ヴラヂーミル公一族の説話』などの対訳テキスト中の綴りや文体に現れているこ

とが解説されている。他方で15世紀後半以降、事務行政関係の文書には、東スラヴ語に特有の口語表現に基づいた世俗的表現を多用する「事務行政文体」が書き言葉として発達した。これを示す対訳テキストとしては、『1649年会議法典』、『百章令』、『家庭訓』その他の抜粋が取り上げられている。

第3節の「主要言語資料の解説」においては、成立年代順に全部で21点の対訳テキストの抜粋を挙げ、その内容と言語の主たる特徴が十分に解説されている。それらのうち『韻文訳詩篇』の抜粋においては、その当時のロシア語の特徴を具体的な表現の中でとらえるため、古教会スラヴ語訳『シナイ詩篇』と現行のロシア正教会の『詩篇』の該当箇所に対訳テキストも併せて比較対照させてあり、絶妙に工夫されている。また、書き言葉だけでなく口語を反映する「モローゾヴァ夫人のアヴァクムおよびその家族との往復書簡」や『フロル・スコベエフの物語』、さらに『リチャード・ジェームスのために筆録された歌謡』などからの抜粋を取り上げることで、当時の文体は文献のジャンルにより実に多様性に富んでいたことを示している。

第5節では17世紀後半の大ロシア語の構造について、ドイツ人H.W. ルドルフの『ロシア文法』の記述に基づく音声と形態の具体例を多数引用し、外国人ゆえの誤りにも逐一触れ詳細に説明している。

第4章の「18世紀（新ロシア語期）」では、ピョートル1世が主導する文字改革と国語政策によりロシア語の正書法や標準的な文法と語彙が制定されたことが言及される。18世紀のロシア語はロモノソフの『ロシア文法』に基づき解説される。次いで、18世紀末に始まった『ロシア・アカデミー辞典』の編纂作業と刊行の経過、その語彙における教会スラヴ語の比重低下と口語の拡大や借用語の急増にも、丁寧に実例をあげ言及している。全部で10点の「主要言語資料」は他より少ないとはいえ、その分長めに抜粋し、対訳テキストと作品内容の詳しい解説が添えられている。

第5章の「プーシュキンから現代まで（現代ロシア語期）」では、プーシュキンの散文作品において理想的な言文一致の模範が実現されたことが強調されている。教会スラヴ語の影響を受け発達した伝統的な書き言葉に古ロシア語の口語的特徴も含めた「古い文語の諸特徴」とすべきものが、新しいロシア語の中に再生することになった。さらに、フランス語に代表される西欧諸語の語彙、語法と「民衆口語の諸要素」を自らの作品中で統合したことで、新しい標準語の規範を確立したとしている。

第2部「テキスト 対訳と注釈」では、順に「キエフ時代」からは①『オストロミール福音書』、②『原初年代記』、③『ヴラデーミル・モノマフの教訓』、④『イーゴリ遠征物語』の4点が、「モスクワ時代（大ロシア語期）」からは⑤『ザドンシチナ』、⑥『ペルミのステファン伝』、⑦『アフナーシー・ニキーチンの三つの海の彼方への旅』、⑧イヴァン雷帝のクールプスキーあて第一書簡、⑨『1649年法典』、⑩『主僧アヴァクム自伝』の6点が、「18世紀（新ロシア語期）」からは⑪『ロモノソフのロシア文

法』、⑫カラムジン『ロシア人旅行者の手紙』の2点の対訳テキストが抜粋されている。

これらの抜粋は単に語義や語形を説明するだけでなく、綴りと発音の相違について指摘したり、とくに多数の誤用に対する正しい語形を示したり、形態の混同や交替しえる語形の例、文体の特徴を示す用法、教会スラヴ語に対する古ロシア語の語形の対比、現代語の表現との対比、その他本文中で尽くせなかった個々の文法現象をきめ細かく説明したものである。実際の古文献のテキストは様々な要因で、同一時代の語形が写本の違いによって異なっていたり、同一のテキスト中においても異なることが決して珍しくない。その意味で対訳テキストにこれだけ丁寧な注釈、解説がついていることは、とりわけ初学者にとって有益なのは言うまでもない。

折しも2011年に中沢敦夫著『ロシア古文鑑賞ハンドブック』が群像社から刊行されたばかりである。これは本書で言うところの古ロシア語の文献を巻末の「ロシア古語学習辞典」に頼り、実際に読むための参考書である。記述に重なるところはあるが、充実したロシア語史の基本書を邦文であわせて読めるようになったのは、実に絶好の機会と言える。

優れた入門書であるから、これだけでも十分に満足いく内容であるが、評者の気になった点を若干、あえて述べることを許して頂きたい。まず、ロシア語のテキストを特徴付けるアクセントの表記についての記述に触れていないことである。個々の語形におけるアクセント音節の位置は時代や方言、ときには同一文献でさえ変わるので、確かに単純に説明し難い問題であるが、入門書の範囲内での簡略な説明と表記の実例があると良かった気がした。

モスクワ時代以降の文献資料は次第に増えてくるのだが、抜粋作品が厳選された反面、紹介しきれなかった資料は、せめて作品名だけでも多少補ってあれば参考になったと思われる。また、各章では信頼できる比較的新しい文献を積極的に駆使し、それに基づき巧く構成されている半面、入門書とはいえ人柄であろうか、著者自身の主張がやや控えめである点が惜しいように感じられた。ただし、これらはいずれも本書の内容や価値を決して損なうような性格のものではない。

以上のように本書では、最新の研究成果を含めた先行研究を広く提示し、可能な限り多くのテキストの抜粋を取り入れるなど、著者が教育者として長年培ってきた豊富な経験の証と、何より後継者に対する深い思いが伝わってくる。できる限り多くの学習者にたとえ独学でも読んでもらえるよう、各所で細かい配慮、工夫がなされている。何度も読み返すことで、音韻変化や形態の交替、統語現象、文体、語彙、各文献の言語特徴における数多くの示唆的な記述内容からは、学習者にとって興味深い研究テーマがいくつでも見つけ出されよう。そういった研究課題に取り組む研究者達が後に続き、著者の思いに答えてくれることを願いたい。